旭川医科大学附属図書館の現状

Asahikawa Medical College Library; Its Present

徳 田 洋 一*

旭川医科大学附属図書館

Abstract: In 1973, concurrently with the foundation of the Asahikawa Medical College, the Library was established and started its services. In 1978, it moved to the new building.

Since its establishment, the Library has been making efforts mainly to collect foreign primary journals, and has been able to obtain the expected results.

Besides the commonly provided services like Contents Sheet Service, the Library has been publishing monthly Bulletin, started the JICST on-line information retrieval service, installed Telex for interlibrary loan and computerized purchasing system of foreign journals.

In 1980, the Library reclassified its collection of biomedical books from the Nippon Decimal Classification to the National Library of Medicine Classification.

In 1973, the Library collection consisted of only 11,919 volumes. By March 1980, it had grown to 55,778 volumes of books and bound journals and about 800 foreign journals are currently acquired.

So far the Library has had to concentrate its efforts on collecting and organizing library materials, which is the major problem a newly-established library has to face. Now having built a considerable size of collection, the Library has to make a next step. Extension and improvement of services, contribution to community medicine as a medical information center, and participation in an academic information system in the future are each and all important problems for the Library.

はじめに

昭和48年9月戦後はじめての国立単科医科大学として、多くの期待を担い注目のうちに本学は設置され、以来今日まで僅か7年余りを経たに過ぎない大学である。附属図書館も開学以来その一翼を担ってその充実に力を尽くし、ようやく一人歩きできる段階まで来たといえるところである。

今回本誌編集子より「新設大学図書館の新しい動き」として特集テーマを組むので、ぜひ書くようにとのこと

に、今までの歩みを見直す意味において、また先輩諸館よりご批判を戴き今後の方向づけとし、一層の発展へのステップとなるならばとペンをとった次第である。

以下本学の生い立ちから現況までを簡単に書き述べてみたい。

I. 図書館の沿革

仮校舎において、準備室の看板が正式な「旭川医科大学」の看板にかけかえられ、山田学長以下教官32名、前田事務局長以下事務官28名の計60名のスタッフでスタートした本学の中で、附属図書館は小野寺附属図書館長事務取扱いに谷本事務長(現広島大学附属図書館事務部長)、黒田図書係長(現北海道大学教育学部図書掛長)の3名で、図

* Yoichi TOKUDA: Asahikawa Medical College Library, 3-11, Nishikagura 4-sen 5-go, Asahikawa 078-11, Japan.
(昭和55年7月31日 受理)

図書館案内図

2階

1階

書業務の基本構想作りから受入れ図書資料の整理まで、筆舌につくせぬ努力が続いた。同年11月5日100名の合格者を迎えて第一回入学式が行われたが、図書館も

利用体制を整え仮閲覧室のオープンとなったわけである。蔵書は開学時設置協力会からの受贈図書11,919冊を始めとして地域の先輩諸大学、研究機関等から雑誌資料

や二次資料の移管を受け順次整備された。

昭和49年8月本校舎第一部完成に伴ない、現在地の福利厚生施設2階へ移転、図書閲覧室と図書事務室が開設されてようやく図書館らしい体裁が整えられた。スタッフも昭和50年4月には7名となり2係制図書課として編成替えをし以来漸次増員された。

昭和53年1月待望の図書館(1,736㎡)が竣工、4月開館の運びとなりようやく一人前の大学図書館として巣立つことができたといえる。本学第1回生は1年しか新図書館を利用できなかったにも拘らず、昭和54年度の医師国家試験に国立大中第1位の合格率という成績の報に、教官学生双方の努力は勿論であるが、我々図書館も幾らかは寄与したであろうという自負を勝手に持たせてもらっている。

大学の事務機構も昭和51年4月から部制となり、図書課も教務部に所属、昭和53年4月からは3係に整備され課長以下12名の陣容となり、サービス体制も一応整ったといえるであろう。

蔵書においても昭和54年の大学院開設にその基準となる専門図書30,000冊以上、学術雑誌300種以上を揃えるべく予算的な面では学内からの協力と、またその収書選定に図書館長以下スタッフの特段の努力があった。単なる冊数を揃えるというのではなく内容ある資料の充実に意が注がれている。

本学では特に単行図書より雑誌資料の充実に力を入れているが、幸いに当時の外貨事情の好転もあり基本となるバックナンバーもほぼ揃えられている。ニュータイトルについても一単科大学の規模としては幅広く購入できたが、これは図書館へ集中配架するという学内協力が、文部省の意図する点に合致し特段の措置を受けることができたこともあづかっている。

学内挙げての努力で昭和54年4月第一回大学院生を迎え、また昭和51年秋開院の附属病院も漸次その研究スタッフが揃い、ようやくにして大学も完成へ99%体制が整い、教官以下その動きの中に大学づくりから研究への回帰が、図書館利用に現れてきている。我々図書館においても完成まで力を注いだ集書への努力を、サービス重点へと体制を立て直すこととして今日を迎えている。

II. 現在の規模

1. 施設・設備

構造 鉄筋コンクリート造(独立2階建)
総面積 1,736㎡

1階 779㎡	閲覧座席	104席
	開架書架(複式BD型)	89連
	電動書架(複式)	114連
2階 880㎡	閲覧座席	31席
	開架書架(複式BD型)	98連
	電動書架(複式)	57連
	雑誌架(バックナンバー棚付)	45台
	(収容可能冊数 延125,000冊)	

視聴覚室(2階) 8ブース設置

主要機器 SONY13インチモニターテレビ

	8台
〃 20インチ	〃 2台
〃 SLP310 ビデオプレーヤ	8台
〃 VP 2100	〃 2台
編集用モニターテレビ・ビデオコーダ	1セット
16mm映写機	1台
スライド映写機	3台
スライド作成機	1台
テレビビューア	1台

複写室(2階)

電子複写機 U-Bix	800	1台
〃 〃	800s	2台
〃 〃	2000	1台

マイクロフィルム・リーダープリンター

住友3M 500M	1台
Kodak Recordak	1台
情報検索用端末機 DEC Writer III	1台
Telex(A3型)(テレックス番号922492)	1台

2. 図書館職員

(図書館長・内科学第1教授 1)
図書課長 1
3係(管理係3, 整理係3, 閲覧参考係5)
(内訳 司書7, 司書補2, 事務官3)

3. 予算(昭和54年度決算額)

教育・研究用図書費

図書46,111千円 雑誌29,981千円 計76,092千円
運営費(光熱・水料等を除く) 5,117千円

4. 受入増加数及び蔵書数

1) 受入増加数(昭和54年度)

区 分	和 書	洋 書	計(冊)
一般教育図書	1,177	459	1,636
医学専門図書	1,444	3,036	4,480
計	2,621	3,495	6,116

2) 蔵書数(昭和55年3月末日現在)

区 分	和 書	洋 書	計(冊)
一般教育図書	11,308	6,704	18,012
医学専門図書	14,053	23,713	37,766
計	25,361	30,417	55,778
ビデオ・テープ	161	19	180(巻)

3) 継続受入雑誌数(昭和55年4月現在)

区 分	和 書	洋 書	計(種)
非 医 学 系	55	73	128
医 学 系	323	718	1,041
計	378	791	1,169

III. 図書館活動の現況

国内の最北端にある医学図書館、それが旭川医科大学附属図書館である。東京からおよそ1,300kmの距離にある地方であるが、交通・通信網の発達した今日、中央と地方の距離は縮まり、またあらゆる格差も縮まってきたといわれているが、人間の生命の源泉に携わる医科大学、その教育・研究・臨床をバックアップする医学図書館にとって、利用者に発達した中央の医学図書館と同様なサービスを提供し、また医学情報を入手しようとするれば1,300kmの距離の壁が障害となる。1) 経済的な負担 2) 相互貸借での敏速性 3) 地域協力の条件不足 4) 先進医学図書館との交流不足 5) 図書館職員にとって研修量の絶対量の不足等々数多くのハンディキャップがある。このような条件の中で図書館を運営していくには資料の収集・機器類による補完・図書館職員の意識の昂揚等が大切な要素となるであろう。

昭和54年からサービス重点へ本格的に取り組むことになり、内容の充実に努めることとしたが、その顕著な現れが文献調査であり、あるいは文献の機械検索へと、また情報入手にスピード化を図るため Telex の導入、あるいはまた分類変更への着手、図書館月報の発行等々重点

的に対処した点を中心に順を追って述べることにする。

1. 図書館報の発行について

館報の発行をきめたが、まずその性格は、発行頻度は等々種々に意見のわかれるところである。先輩諸館の特色ある「図書館報」類も充分参考にさせて戴いた。

結果、当館発行の館報としては ア) 館内日常のサービス活動を知らせる一利用案内 イ) 図書目録年刊版の補完的役割としての一新着図書案内 の2つの性格を持たせることで出発することとなった。

平常業務に余り負担をかけず、息ぎれしないよう継続発行するため、編集委員により充分検討を願った。編集委員は管理・整理・閲覧参考の各係より各1名、責任者として係長1名があたり計4名の構成である。

発行頻度については毎月発行とし、新着図書案内は受入れの翌月には学内にお知らせすることが目標とされた。館報の名称は「図書館月報」と名付けられ昭和54年5月に1巻1号が発行された。発行部数は350部、配布内訳は学内の講座・学科目等に約100部、学生配布用として約150部、北海道地域大学図書館、医学系大学図書館および公立病院等に約100部である。費用については、発行初年度のこともあり、また年度内で図書館運営費から多額の運用も望めないため、表紙のみ外注で、タイプ打ち、印刷等すべて学内作業で発行している。

なお、新着図書案内は、従来「図書館目録」として年一回発行のものに利用することが試みられた。従来の方法での刊行では、利用者の手許に渡るまで1年数ヶ月もかかる、また費用についても問題がある、この点への改善策として考え出されたものである。それは月報の1～12号を合すると当該年度に受入れた図書全てを網羅することになるので、完結後書名索引を付し合冊製本とすることで、従来の「図書目録」に代替えさせる方法である。このため「新着図書案内」欄は1～12号を延ページとしている。この方法により第1巻を「昭和54年版図書目録」として発行したが、従来の図書目録発行費用の約半額で済んだ。

現在月報は第2巻目に入っているが、編集委員の間では「利用案内」欄の掲載テーマ等に関して検討が行われているが、教官から学生までの広い対象へ共通する内容として、色々意見が出され、二次資料の使い方をシリーズで掲載することなどが話題となっている。

2. 外国雑誌の収集と管理

2-1 収 集

医学図書館の資料収集は、全般的に資料が高価なため、理想的な蔵書構成を確立していくには非常に困難な事業である。単行図書特に臨床系統の図書等は数年で利用度が低下する事実などから、本学の資料収集の方針として雑誌資料の充実に力点を置いていることは前述したが、外国雑誌の質と量を継続的に確保することも重要な課題である。高価な外国雑誌はできる限り重複を避け、100%近い集中管理で無駄のない収集がどこまでできるかにかかっている。幸い本学は、図書館委員会において開学以来この点が重要視され、合理的な収集計画が追求されてきた。

- 1) 雑誌資料はできる限り広く集める。このための予算の確保
- 2) 雑誌の集中管理を強力に推進する
- 3) 重複は講座等と調整してできる限り避ける
- 4) バックナンバーの収集年限は原則として1965年以後とする（基本的な資料は初号より収集）
- 5) 資料は原則としてオリジナルを収集する
- 6) 選択については講座等の意見を集約し最大限に生かしてゆく
- 7) 未設置講座についても基本的な資料の収集には配慮する

以上の方針にもとづいて雑誌資料の収集が行われてきたが、その結果100%近い集中管理が実現でき、重複についても最大限避けることができた。

2-2 タイトル数について

地方の医学図書館にとって雑誌のタイトル数、理想的なタイトル構成の形成は重要である。このことは利用者に対するサービスの基本にかかわることであるが、幸い本学は文部省をはじめ学内の理解を得ることができ、現状では理想的な投資ができたと思っているが、現在の財政硬直化、外貨事情（円安傾向）並びに重要雑誌の発刊等によっては、現在受入れされているタイトルの見直しは当然必要になってこよう。

（昭和55年度継続受入雑誌数 IIの4、3）を参照）

2-3 外国雑誌購入事務の電算化

国内の先進大学図書館ではすでに図書館業務の各分野に電算機を導入し、業務の省力化を図ってきている。

現在12名のスタッフで各種の利用者へのサービスを進めて行くには、直接利用者に接する閲覧・参考部門に職員を重点配備するのが理想である（本学では現在、管理・整理部門6名、閲覧・参考部門5名、管理職1名）バ

ックアップする管理・整理部門の業務は、できる限り業務の合理化・省力化を図り閲覧・参考部門に余力を回すことが大切である。これを実現するには定員増の望めない今日、各業務に電算機を導入し補完する必要がある。本学図書館も開学以来この点に注目し準備を行ってきたが、その第一段階として外国雑誌購入事務の電算化を昭和55年度中に完成の予定である。このシステムでは将来外国雑誌の購入事務にとどまらず、受入事務（寄贈等も含む）、所蔵目録の作成、製本事務、雑誌台帳の作成等、外国雑誌に関して種々に発展できるよう配慮し作業を進めているが、現段階の外国雑誌購入事務では次の出力が予定されている。

○予約関係調書

ア. 予約チェックリスト	イ. 購入調書
ウ. 商社別購入調書	エ. 所属別購入調書
オ. 予定価格内訳書	カ. 予約契約内訳書

○契約関係調書

ア. 契約チェックリスト	イ. 購入調書
ウ. 購入報告書	エ. 商社別購入調書
オ. 所属別購入調書	カ. 予定価格内訳書
キ. 契約内訳書	ク. 係数換算表
ケ. 契約額集計表	コ. コード表（4種類）

○精算関係調書

ア. 精算チェックリスト	イ. 精算調書
ウ. 精算納入調書	エ. 戻入調書
オ. 精算額集計表	カ. 後金チェックリスト
キ. 後金納入調書	ク. 未納調書

○その他 所蔵タイトルリスト

3. 整理業務の現状

昭和53年4月より整理係として独立整備されたが、それまでは図書係として整理業務のかたわら閲覧参考業務も受持つ体制であったから、必然的にサービス業務及び整理業務に充分対処したとはいえなかった。

3係整備以後、各係分掌事務内容の見直し、並びに充実が図られたが、整理部門としては開学以来懸案となっていた分類変更（医学専門図書をNDCからNLMCへ）へ取り組むこととなった。

3-1 分類変更について

本学設置時、医学専門図書の分類については、その構想の中にNLMC分類の採用が意図されていたが、開学にさいし設置協力会より11,919冊の受贈図書のあったことはすでに述べたが、それらの図書はすでにNDCによ

って分類され、図書ラベル、目録カード等についても同様であった。加えて新設大学の常として購入する資料は多量であり、人員配置も年次計画のために少ない係員で業務処理に当らねばならないなどで、そのまま現在まで手が付けられなかった。

昭和53年度で大学も学年進行を終り、引き続いての大学院開設と、それまでの集書に明け暮れの段階を越え、ようやくにして長年対処できなかった分類も、変更作業計画へ進むことができたといえる。

従来の分類体系より新分類へと一言でいっても、その作業量と終了までの日数、日常業務に影響なくできるのかどうか、またそれ程のメリットがあるのか、時間をかけて検討がなされた結果

- 1) 開学時設置協力会から寄贈された図書の目録カードが不備で、分類等についてもいずれ見直す必要がある。
- 2) NDCは学問全般にわたる分類としては適しているが十進式のため展開性に乏しい、また医学という特定分野でみた場合、専門分類としてNLMCが最適である。
- 3) NLMCは学問体系よりも身体・器官系を優先して分類しているので解剖・生理・疾患等それぞれ分散しないで1ヶ所に集まる。これは現在の教育・研究上にも使い易い。
- 4) NLMCは「National Library of Medicine current catalog」の使用により分類業務を大幅に軽減できる。

以上のメリットが考えられるが、それに対するデメリットとして

- 1) NDCとNLMCの2本立分類のため利用上若干の混乱は避けられない。
- 2) 作業量が多く年度を越すような長期間にわたる。
- 3) 講座等に入っている専門書については変更する余裕が出ない。

以上総合的に検討し実行に踏み切ることとなった。

この件に関して図書館委員会並びに教授会の議を経て正式に決定された計画概要は次の通りである。

- 1) 作業対象冊数

図書館所蔵医学専門図書	約7,000冊
-------------	---------
- 2) 作業用ファイルの複製と編成 約20日間
- 3) 図書への新分類の書込み 約6ヶ月
- 4) 各種目録カードへの新分類書込み 約4ヶ月
- 5) 書架移動、その他

(アルバイト4名採用による) 約20日間

6) 目録カード等の修正及び残務整理

(アルバイト1名採用による) 約6ヶ月

以上の変更作業に入るに先立ち担当者による新分類表(NLMC)の勉強会(使用コードの決定等)、館員全員に対する研修会を経て、昭和54年6月から作業が開始され現在最終段階に入ったが(明年2月完了予定)、日常の整理業務を遅滞なく済ませ乍らの作業であり、直接担当する整理係にとって、また図書館にとって一つの大きな事業を終えることとなる。

3-2 使用目録規則等

現在目録規則は「日本目録規則新版予備版」及び「英米目録規則1967年版第6章改訂版」によっている。また件名表は、医学系の洋書については「MeSH」、和書については札幌医科大学附属図書館作成の「医学及び関連領域件名標目表」を採用。非医学系図書については「国立国会図書館件名標目表」を採用している。

目録の編成は閲覧用と事務用に大別し、以下の通りである。

A. 閲覧用カード目録

- a) 著者書名目録

— 図書館所蔵(医学系一和洋混排)	
— “ (非医学系 “)	
— 講座・学科(医学系)	“)
目所蔵 (非医学系)	
- b) 件名目録(図書館・講座等を含め和洋混排)

B. 事務用カード目録

- a) 基本目録(物品番号順・和洋別)
- b) 書名目録(図書館・講座等を含め和洋混排)
- c) 分類目録(図書館所蔵のみ—NLMC, NDC別, 和洋混排)

C. 冊子体目録

- a) 旭川医科大学図書目録(年度版)

昭和48~54年度	6冊
-----------	----
- b) 旭川医科大学学術雑誌目録

1975~1980	6冊
-----------	----
- c) 旭川医科大学視聴覚資料目録 1979 1冊

4. 利用者サービス

4-1 閲覧・貸出

図書館は一階(図書)閲覧室と二階(雑誌)閲覧室と

○閲覧統計（時間内）

区 分 \ 年 度		昭54	53	52	51	50	49	48
入 館 者 数		67,277	57,814	30,807	31,352	32,341	23,328	2,311
館外貸出利用者数	学 生	6,241	7,092	7,080				
	教職員	4,071	3,450	3,129				
館 外 貸 出 冊 数	学 生	8,809	10,265	9,501				
	教職員	8,244	7,082	7,220				

夜間閲覧（時間外）

区 分 \ 年 度		昭54	53	52	51	50	49
入 館 者 数		17,216	13,269	1,509	1,573	980	602
館 外 貸 出 冊 数	学 生	3,734	3,466	783	743	268	156
	教職員	2,752	1,969				

からなり、それぞれにカウンターが設けられている。二階はレファレンスカウンターであり、資料の貸出し（図書・雑誌）、督促等の業務はすべて一階カウンターで行っている。

全館完全開架方式をとっており、貸出しの方法については、開学当初二枚複写のスリップ方式で貸出票に必要事項を記入してもらっていたが、昭和53年4月新館オープンと共に、それまでの貸出システムに再考がなされ、図書の貸出しについてはブラウン式に改められて現在に至っている（雑誌については従来通り）。利用者は図書と「図書館利用証」を持ってカウンターに来る丈でよく、また予約を受付けた場合には必要事項を記載した「予約カード」を貸出券にはさみこむ方法で行っている。

本学では利用条件に身分による差をつけておらず、すべて平等に扱われている。返却日までに図書を返さないときには、当該貸出券につき遅れた日数の二倍の期間、貸出しを停止するという罰則を設けている。

利用対象が約1,000名程度と比較的限られた人数であり、また臨床系の教官等は診療のため、学生についても講義等により休憩時間内での図書館利用などを考えると貸出方式の変更は成功であったといえるであろう。

ここ数年間の館外貸出状況の変せんを見てみると、上に掲げる表のようになる。

入館者数は依然として増え続けているが、館外貸出しの人数及び冊数については昭和53年度とほぼ同様の数字を示している。これには次のようなことが考えられる、

その一つは複写室に誰でも使用できるコピーペンダー付複写機を備え付けていること、それによって必要部分のコピーをとる丈でよく、いちいち資料を借り出さなくともよくなったこと。二つには夜間開館を充実したことによって、忙しいあい間をぬって昼間図書館にこなくとも夜間開館を利用すればよくなったこと。ちなみに、新館ができる昭和52年度までは、夜間開館は隔日で行われ、しかも午後6時30分まで（土曜日は午後2時）であった。以上の他に考えられる点として、昭和54年初の卒業生を送り出し、その多くが研修医として本学に残ったから、その人達を含む教職員の図書館利用が着実な伸びを示し、学生の利用は一応の水準に達したとみてよいことなどが考えられる。

4-2 文 献 複 写

二階複写室には前述のコピーペンダー付複写機の他に2台の複写機等を設置（施設・設備の項参照）して学内文献の複写に便を図っている。

- a. 私費 コピーペンダー付U-Bix800s を使用してもらう。これはB4版の大きさしかとれない。料金は1枚20円。（学外者の私費扱いについては1枚45円）
- b. 校費 二階カウンター備付の「文献複写申込書」に所定事項を記入し、U-Bix2000 を使用してもらう。B4版、A3版の二種類の大きさがとれる。料金は1枚11円で1ヶ月ごとにまとめて講座費の振替えを行う。

昨年1年間の学内校費による文献複写の数は2,339件で、その前年は560件であったから、めざましい伸びといえる。研究棟の各階にも Xerox が置かれていて同じ11円で校費により利用できるが、文献の複写であればわざわざ資料を持ち出さなくとも図書館で必要論文を複写すればよく、また Xerox ではA3版のコピーがとれない、図版等の複写にはU-Bix のほうが数段きれいである等々が考えられるが、やはり研究者が本来の研究に戻ってきていることが、利用数の増えた重要な要素と考えられる。

次に学外からの文献複写申込状況をみると、ごく最近まで年間100件足らずのものであったが、昭和54年度は707件とこれについても著しい伸びをみた。利用されている内容を見ると医科系大学に限らず基礎医学系雑誌の利用が多かった。洋雑誌バックナンバーの充実と共に、昭和54年春 Telex が図書館に設置されたことにより、最近では Telex設置館からの申込みが特に目立ってきている。本学は雑誌をはじめとする資料の集中管理を行っているから、国立の機関からの申込みであれば、申込みを受けたその日のうちにコピーを郵送するということが可能であり、多少離れていても早くコピーが手に入るといってもあつてか、道外の国立大学特に Telex設置館からの申込みが増えてきている。

なお、昭和54年度から国立大学相互間の文献複写業務の手続きが改善され「複写経費相当額の予算を申込者の所属部局から当該依頼館に適時振替える」この「振替える経費については文部省からの予算配分に対処して経費

の整理を行う」とされ、コピーを迅速に入手することが可能になった。しかし、公私立大学等では複写経費の徴集方法についてはまちまちであり、また国立大学が受付館となる場合には、複写料金を受領(納付)した後でなければ複写物を送付できないなど、料金後納制をはじめ複写業務手続きの統一、業務の簡素化、迅速化について解決していかなければならない点も多い。

学外への文献複写申込についても開学当初は200件余であったものが、昨年度は1650件とこちらも漸次増加している。

本学は創設期9学科目、8講座でスタートしたが、その後学年進行による講座の増設が行われ、昭和54年度には10学科目、30講座(基礎14、臨床16)と当初の計画をほぼ完了し、と同時に附属病院開院以後のスタッフ漸増と、図書館の奉仕対象が急激に増えたことによると思われる。また昨年には大学院生、研修医をはじめとする若い研究者も増えたが、これらの人達による学外文献複写の利用は非常に多くなってきている。文献調査やオンライン情報検索のサービスを開始してまだ間もないが、これらによりサーチできた文献を学外に求める件数も多くなってきている。国内に所蔵せず国外に求めたものも昨年度は80件あった。BLLD を国費で利用できるようになってから、国外から、文献コピーを入手する場合 BLLD でほとんどその希望を満せるが、謝絶されたものについては、アメリカの大学図書館に Interlibrary loan

により依頼したものもある。

4-3 文献調査・オンライン情報検索

図書館ではこれまで述べた文献複写業務や相互貸借の他に、コンテンツシート・サービス、IMによるSDIサービスおよび文献調査、オンライン情報検索サービス等種々のサービスも行っているが、ともにこれらのサービスは実施して未だ日が浅いが、大学の創設期は資料の充実と、これに伴う整理作業に終始してきたこともあり、これからは利用者への積極的な情報の提供に力を入れていかなければならないと考えている。

コンテンツシート・サービスは文献速報サービスの一つとして昭和53年の春から、体制を整え本格的にサービスが開始された。サービスを希望する雑誌タイトルは講座単位で登録してもらうこととし、初めてのことでもあり1講座20タイトルまでとして始めたが、昭和54年からは約100タイトル近い新規購入雑誌が増えたこともあって、1講座当りのタイトル制限もはずして再募集を行い現在に至っている。(現在サービス中の延タイトル数は305タイトル)

文献調査サービスもこれまで利用者からの希望により受付ける程度であったが、昭和54年秋から正式にサービスを開始した。最近では研修医によるごく簡単な調査依頼も多い。しかし manual 方式による文献調査は、時間と人手がかかり他の業務への影響もあるので、初歩的調査については利用者に直接検索してもらうようにしている。

本年第2回目の卒業生を送り出したが、研修医として本学に残り研究を続ける人々が増えてきたため、医師国家試験発表後の5月下旬、初の試みとしてこれら若い研究者を対象とした「医学二次資料の使い方講習会」を3日間の計画で開催した。計画の3日間に都合悪く受講できなかった者など、その後も同講習会開催の希望が寄せられ、最終的に計7回約50人の参加者をみた。十分な準備期間もなく、適当なテキストも用意できずに実施したにも拘らず、受講者に求めたアンケートによれば、明年の新入医局員にも是非参加をすすめたいという意見が圧倒的、と好評であり直接講習会にたずさわった館員も内容を充実したい、テキストも用意したいと意欲を燃やしている。

今後の計画としては、在学生特に5年目、臨床実習前の学生等への「医学文献の探し方について」のガイダンスなどを具体化したいと考えている。

IMによるSDIサービスはコンテンツシート・サ-

ビスとはほぼ併行して行われたが、余り利用されていない。しかし、日本科学技術情報センター(以下JICSTという)が、昭和53年7月よりサービスを開始した電話型公衆通信回線網を使つてのオンライン情報検索(JOIS)については、館員は勿論のこと利用者も非常な興味を示した。昭和54年2月札幌の経済調査会をセンターとして専用回線による情報検索が始められると、早速利用者からは是非検索して欲しいとの希望もあり、館員にも早急に対応できるようJICST主催による講習会等で技術習得をしてもらった。利用者の要望に対しては図書館で検索式を作成して札幌のセンターに送り、検索結果を郵送してもらうなどで対応したが、満足すべき結果とはいかない面も多少感じられた。

本年2月からの公衆回線網によるサービス開始に合わせ、TSS用端末機の選定、利用方法の検討、JICSTとの契約と準備を進め、また「図書館月報」を通じて、JOISサービスの内容紹介等3回にわたりPRに務めた。準備も整い、正式な回線開放と共に予定通り学内で検索サービスを開始することができた。

利用を希望する場合、備付けの「オンライン情報検索申込書」に必要事項を記入してもらうが、効率良い結果を得るため、利用者と綿密なインタビューを行って検索式を作成している。端末機の操作は係員が行うが、検索には利用者に立合ってもらうことを原則としている。

サービス開始後順調に利用されているが、6月初旬それまで未だ利用したことのない講座等を重点とした、学内無料デモンストレーションを開催したところ、その反響も大きく、その後の利用も大きく伸び効果的であった。学年後半の学生ならびに研修医等を対象とした「利用ガイダンス」等を現在計画しているが、その中にぜひこのオンライン検索も組み込むなど毎年開催したいと思っている。

JOIS-I についての問題点は、すでに各ユーザによって語られているのでここではふれないが、近年我が国における二次情報提供システムは、JOISをはじめ東大のTOOL-IR、筑波大学のIDEAS-77、その他種々のシステムが開発されており、中央から離れた土地にある本学は、コンピューター等これら機器により中央の情報をより早く研究者に提供すべく、積極的に取り組んでいかなければと考えている。

現在、IDEAS-77、特に Excerpta Medica ファイルの利用のために導入を検討中であり、今後各種データベースの導入も多くなることが予想されるが、複数種類

のデータベースと利用者を結ぶ情報の仲介者として、図書館員の果たす役割は重要である。中央での研修会に参加させるなど、館員のレベルがよりアップするべく意を用いて行きたい。

IV. 当面の課題

これまで大学の整備（学年の進行・附属病院の開設・大学院の設置）に合わせ、附属図書館もその施設・設備・蔵書の充実へと順次整備がなされてきた。新図書館の落成と共に“利用者の必要とする情報を積極的に提供する”をモットーとしてサービス重点へと方向を定め、本格的サービスを目標として1年余り、やっとその緒に就いたばかりである。まだまだ反省すべき点も多いと思っているが、改めて現在何が必要なのかを展望することにより、当面の方向性を持たせたい。

1. 業務の再点検

いままでも前進あるのみといった調子で業務に当たってきたが、時には立止ってみる必要もあると思っている。現在行っている業務の一つ一つを洗い直し、組み立て直してみることで、また利用者サービスについても一通りのサービスは行っているが（前述）、閲覧業務に、文献複写業務に、あるいはまた情報検索サービスにと一層内容を深めるのは勿論であるが、日常何事もなく流れている業務の分析、それが利用者に直接接しない内部業務であっても、間接的にはサービスにつながるものであるから、そのためにも「スタッフ・マニュアル（業務指針）の作成」も大切なことと考えている。各係（部門）間業務の見直し等、将来へ一層の発展を期すためにもぜひ必要なことと思っている。

また現在の図書館は、従来図書資料の貸借中心とは違い、大きく変革をきたしているが、現時点においても視聴覚教材の積極的利用、CAI（コンピューター利用の学習装置）の導入も考慮するなど、節目節目での業務の見直しは必要なことであろう。

2. 地域情報センターとしての役割

昭和47年旭川医科大学の設置が約束され、地域の医療過疎を解消したいとする北海道民挙げての強い要望が、医科大学設置協力会を通じて多数の研究機器類、図書及び学術雑誌の寄贈など、大きな期待を担って本学は昭和48年9月開学した。

医科大学は医学の進歩発展に寄与する医学研究と、地

域社会の保健と医療の向上に貢献する良医の育成、の面を持っているが、本学はこれらの面において北海道地域特に道北地域の強い期待を担っている。

本学から第1、2期生が巣立ったが、未だ地域に定着したとはいえないであろうが、漸次

地域の医療に従事することになるであろう本学卒業生また、従来から地域医療の担い手である病院・保健所等を始めとする医療従事者

旭川医科大学は、以上を包括する医療関係者の地域医療（医学）センターとしての役割をも期待されていると思われるが、附属図書館も当然その一翼を担い、地域の情報センターとしての役割を果たさねばならないと思っている。現在具体的な方策は持たないが先輩諸館のお知恵を拝借したい。

3. 全国学術情報システムにおける役割

本年1月29日学術審議会は文部大臣よりの諮問「今後における学術情報システムの在り方について」に答申がなされた。この中では近年における学術情報量の急激な増大、研究の成果として生み出される学術情報の蓄積加工、研究者の必要とする情報の的確なる提供の必要性が述べられ、そのための学術情報流通システムの整備が強く望まれている。

文部省においては、効率的な学術情報の収集、情報検索システム及びデータベースの形成等について、すでに対処し、また検討が行われているが、これら検索システムと情報の最終利用者である研究者とを結ぶ窓口機関、として大学等の図書館が担うべきであるとされている。これは今後の学術情報流通システムの中で重要な役割を担うことになっているといえる。

全国的な情報システムが本格的に始動するまで、また我々地方大学の果たす役割の位置づけが定まるまで、地域の情報センターとしての役割を果たすためにも、現在所蔵情報のコンピューター処理（学術雑誌所蔵分の入力等）を検討しているが、学内的な整備に力を入れて行きたい。

全国学術情報システムについて具体的な方策についてはまだ出されていないようであるが、きたるべき情報化時代の担い手となる情報処理・情報管理に携わる要員の育成、現職者の資質の維持向上を図ることも、また重要な課題と思っている。

お わ り に

現在の仕事を今振り返ってみて、これで良いのだろうか、少し急ぎ過ぎたのではないかという気持ちも多少ある。図書館の仕事は地味であり、始めたら途中で中止とはいかない、息長く積み重ねて行く事も大切であろうとも思うが、図書館のスタッフは若い（平均年齢31才）一番油の乗った年頃とでもいうか、新しい医学図書館をつくって行くのだと皆が張り切っている。

それぞれの係（3係）が勝手に走り出しても困る。今何が一番の問題なのか、こういう事をやっているのだ

と、皆が知り理解することも必要であろうとのことで、毎週一回月曜日の開館前に全員の連絡会を持っている。その他係り間の調整等を主目的とする係長会議を月一回以上開いている。皆で仲良く step by step を心がけて図書館づくりをやって行きたい。

以上、思いつくままを書いてきたが、書き乍ら何か面映ゆい感じである。私が本学に赴任してからまだ1年半、私が来てから始まった仕事も無いわけでもないが、大部分は前述の現広島大学附属図書館谷本事務部長を始めとするスタッフの皆さんが、開学以来努力して敷いたルールの上に乗っかっているからであろう。